

全ての人のための「特別」

大口高等学校 一年 川越 美月

私たちの社会には、様々な人が暮らしています。年齢、性別、身体能力、文化、言語など、その多様性は計り知れません。しかし、これまでの社会は、「平均的な人」を基準に設計されてきたように感じました。その結果多くの人が不便を感じたりする状況が生まれました。そんな中で今、改めて注目されているのが「ユニバーサルデザイン」という考え方です。ユニバーサルデザインとは、「年齢や能力、状況などにかかわらずできるだけ多くの人が利用できるようにつくられたデザイン」のことです。

実際に、私は家族でショッピングモールに行ったとき、ユニバーサルデザインが色々な場所に施されているのを目りました。まず目を引いたのは、エントランスに設置されたなだらかなスロープでした。ベビーカーを押す親子も、車椅子を利用する人も、何の不自由もなく施設内へと入っていく。これまで見てきた多くの建物が、段差を乗り越えられない人々に不便を強いていたことを思うと、このスロープはまさに「誰もが使える」というユニバーサルデザインの理念を体現しているように感じられました。施設内を進むと、さらにその理念が深く根付いていることに気づかされました。トイレは広々としており、手すりが複数箇所に設置されていました。視覚に障がいのある人向けには、点字ブロックだけでなく、音声案内システムも導入されています。商品の陳列棚は車椅子の人でも手が届きやすい高さに調節され、通路も十分に広く確保されていました。これらの配慮は、特定の誰かのために設けられたものではなく、そこにいる「全ての人」が快適に過ごせるようにという思いから生まれたものだと感じました。

このショッピングモールでの経験は、私にとって大きな気づきを与えてくれました。ユニバーサルデザインでは、障がいを持つ人や高齢者だけのためのものではない。それは子どもを連れた親、一時的に怪我をしている人、海外からの観光客など、多様な人々が共に快適に暮らせる社会を築くための、普遍的なアプローチなのです。誰もが、「特別な配慮」を意識することなく、自然に社会に参加できること。それこそがユニバーサルデザインが目指す理想の姿なのだろうと思います。しかし、残念ながら、私たちの社会にはまだユニバーサルデザインが、十分に浸透しているとはいえない現状があります。ユニバーサルデザインの認知度が低く、普及が進んでいない場所があることや、コストの問題、専門的な知識や人材の不足などが課題として挙げられています。これらの課題を解決していくためには、ユニバーサルデザインの認知度を高め、より多くの人がその考え方を理解すること、ユニバーサルデザインに対応した製品や環境の導入コストを企業や自治体が負担できるように支援策を検討すること、ユニバーサルデザインに関する専門的な知識やスキルを持つ人材を育成することや子どもの頃からユニバーサルデザインを学ぶ機関を増やし、多様な価値観を受け入れる心を育んでいくことが必要です。

また、ユニバーサルデザインには、できるだけ多くの人が利用しやすいように設計するための七つの原則があります。一つ目は、誰もが公平に使える公平性、二つ目は、使う時の自由度が高い自由度、三つ目は、使用方法が簡単で分かりやすい単純性、四つ目は、欲しい情

報がすぐ理解できる明確性、五つ目は、ミスや危険につながらないデザイン安全性、六つ目は、身体への負担が少なく楽に使える省体力、七つ目は、使いやすさと大きさと空間の確保空間性の七つです。これらの原則は特別なことではなく、少しの意識と配慮でできることです。一人ひとりがユニバーサルデザインの視点を持つことで、より誰もが快適に過ごせる社会に近づくことができます。

ユニバーサルデザインの推進は、高齢化が進む日本において、高齢者や障がいを持つ人が安心して外出できる環境は、消費活動を活性化させ、社会全体の活力を生み出すことにつながります。私たちが目指すべきは、誰もがそれぞれの個性や能力を最大限に発揮することができる社会です。ユニバーサルデザインは、私たち一人ひとりの意識の変化と行動が、その実現を加速させてくれると信じています。そして、誰もが生き生きと暮らせる社会が当たり前になる未来と、一人ひとりがユニバーサルデザインの視点を持つことで、より誰もが快適に過ごせる社会を、私は心から願っています。